浜人の性

柏崎　睦　岩手

生きて来し八十年の歳月を消しゆくごとく降りつもる雪
積りたる雪のおもてにほんのりと夕陽は差してしばし華やぐ
小半日飽くこともなく見守りぬ電信柱のたてかへ工事
新しき鰯をみつけ干物にす浜人(はまびと)の性(さが)をわれはもつらし
これからの何年先をながらふや燕脂の色の防寒ぐつかふ

長き夜

黒岡　美江子　千葉

二歩進み一歩退く病状の夫の小さくなれる顔見つ
病室の窓より見ゆる家々の明りが増えて長き夜はじまる
譫妄の夫が糸巻き巻くごとく指にまさぐるあらざる糸を
病む夫のマスクより漏るる酸素音静かな夜の部屋に響けり
たかだかと右手を挙げて指させり夫には見ゆる指先の空(くう)

最後の一口

小倉　敬＊　神奈川

冷め切ってしまった最後の一口を飲み干す何を惜しんでいるのか
不機嫌が顔に出ぬようこの頃は努めてはいる、つ・と・め・て・は・い・る
一冬を羽織りしベージュのカーディガンくの字に肘のかたちを残す
暖かくなっていくらか前向きな心をくじく、ああスギ花粉
コーヒーでいいかと問えば一瞬の間の後の「ハイ」　紅茶にするか

お通し

四野宮　和　之　東京

きさらぎの陽にひかりをり塗り立ての太くて白き路面の〈止まれ〉
賃上げの満額回答続出の春よしわれにかかはりなくも
コンビニの撤退あとのビル一階半年経ちて塾の灯ともる
お通しが出ればすぐ食べ品定めしをり居酒屋好きなる舌が
〈阿闍梨餅〉散売りしてゐし伊勢丹の地下のショップがあらあら在らず

馬鹿陽気

千　明　武　紀　東京

令和六年二月コートのいらぬ午後ヒートテックは脱げず汗だく
しひたけが二月に採れる馬鹿陽気しかしおいしいみなで分けよう
耳とほき仲間がふえてチルホールつかふときには大声が飛ぶ
しわしわの貌のせつちやん背もまがるだけどそのこゑ綺麗で透る
せつちやんへホワイトチョコに加へたり百合・フリージアの白い花束

扉の軋み

中　村　敬　子　東京

傘の雪振り落としまた歩きだすじんわり重い春のはじまり
役降りたわけではないが押入れの雛と兜を出さなくなりぬ
沈丁花かをる横道わが犬がかならず寄りし一本咲けり
ふる家の扉の軋みおかへりの言葉のやうでずつとそのまま
ぬばたまの黒南風吹きて生まれ月　ひとつ古びて白南風を待つ

余震おそれて

沢　麗子　富山

玄関の横の和室で寝起きして二か月過ぎき余震おそれて
椅子の背に掛けるま白きカーディガンわたしを包む繭のやうなり
雨のなか自転車をこぐ制服の男子の腿は全回転す
唯一の町のスーパー閉店し駐車場からくらやみはくる
プールより上がりし時になまもののわれの体は魚のにほひす

形状記憶

吉田　美奈子　愛知

合掌のかたちに重ねしまひたり指やや曲がる革の手袋
癖じわの少したがひて曲がりをり革手袋のみぎてひだりて
がうじやうなわれに似てをり手熨斗する革手袋の形状記憶
使ふひともうあらねども仕舞ひおく夫の手袋夫のかたちす
大き鯉ゆらり鰭打ち三月の雨ににごれる水に沈けり

されど

武内　寿真子　三重

思ひ当たる不孝あれこれ逆剝けの左おやゆび触るればひりり
「早春賦」聴きつつ夫とスイングすこの感触を憶えておかん
毒殺未遂、横にもなれぬ独房にナワリヌイ氏は耐へたり、されど
献花するだけで拘束四百人プーチンは恐るナワリヌイ氏を
「卑下慢」と評されてその意味を知る長雨に庭の水仙かしぐ

枯れぬ花

藤田倫夫　三重

さやさやと眠りに入れる長病みの妻を見定め月とうた詠む
介護、家事、家計の整理やつと終へ春の歌詠むドリームタイム
できるだけことばやさしく病む妻へゆつたり話す〈いい夫婦の日〉
ジャスミンが咲き出したよと眼の見えぬ妻告げ来たりおぼろ月夜に
こころ病む妻のどこかにまだ枯れぬ花が在るのだ笑みつつ眠る

風の尻尾

北　祐二郎　佐賀

寒空の下かじかめる手のひらに白々と輝るスマホのひかり
霊園の坂のぼるごと東風吹きて空へと靡く菜の花の群れ
きさらぎの湖上さやりと奔りゆく風の尻尾は銀鼠に光る
街路樹に椋鳥の群れほとほとと憂ひの種を落とす夕さり
許すとは思ひ上がりか春の夜の雨脚あばきゆく稲光

待ち儲け

田中久子　長崎

食事介助いづれ受けるを思ひたり歯医者であーんと口開けるとき
外つ国の四団体が表彰す五ノ井里奈さんの勇気をたたへ
担当医覚えずともよし肺ガンのCT検査に疑ひ晴れて
病院の駐車料金高くなり今日六〇〇円ランチが消えた
待ちぼうけを待ち儲けへと切り替へて駅のベンチでコスモス誌読む